

目次

はしがき

新渡戸稲造の残した「伝教師」的足跡

一 「小日向会」	3
I 「新渡戸稲造博士」	3
II 「太平洋会議における新渡戸博士」	6
二 「伝教師」とは	9
三 基督友会日本年会の組織化	12
四 日本人クエーカー第1号信徒としての証	14
I 「人生雑感」	14
II 「神の御声を聞け」	17
III 「信仰なき国民は滅ぶ」	20
信仰なき国民は滅ぶ	21
愛国心と国際心	31
五 最後の大演説	32
九月八日夜が最後の大演説	33

新渡戸稲造と普通連士学園

一 「父と普通連士学園」(新渡戸ことこの講演)	35
二 「卒業式に臨みて」(新渡戸稲造の講演)	39
三 普通連士女学校後援会	44
四 思い出草	45
五 残された記録「降誕節」	48
降誕節	51
六 秩父宮妃殿下のご来校	53
フレンドの将来	54
七 「思えども益なし、学ぶに如かず」	56

モリス邸の今昔

一 内村鑑三と新渡戸稲造の絆	59
二 普通連士学園に、新渡戸稲造ホール	62
I モリス邸の歴史	64
II イズリエル・ウイスター・モリス夫妻	66
III ウイスター・モリス夫妻	67

IV モリス邸	71
V モリス邸からフレンズ・セントラル・スクールへ	72
三 日米両国の友好と理解に一役	73

―キリスト教フレンド派日本伝道の側面から見た―

新渡戸稲造と津田梅子を結ぶ縁

一 明治初期	76
I 一八七一年の出来事から	76
II 新渡戸稲造と津田塾大学との関係	78
二 津田仙、勝海舟とハーツホン、	
プレスウエイト、ホイットニーとの関係	79
I 津田仙	79
II ヘンリー・ハーツホン	80
III ジョージ・プレスウエイト	82
IV プレスウエイト家	83
V 海舟を感動させたウイリス・ホイットニーの孝行	87
VI 結婚後のホイットニーの業績	91

- 三 内村鑑三、新渡戸稲造、津田仙とジョセフ・コサンドとの関係 94
 - I 学農社農学校と内村鑑三 94
 - II フレンド派の日本伝道 96
 - 『インターチェンジ』寄稿文「手紙」 98
 - III コサンド、津田仙と普連土女学校 101
 - 四 津田梅子とメアリー・モリスの関係 102
 - 五 アナ・ハーツホンと新渡戸稲造夫妻、津田梅子の関係 105
 - I アナ・ハーツホンの来日 105
 - II 新渡戸稲造夫妻の帰国 107
 - III ハーツホン父娘の帰国とコサンドの辞任 109
 - IV ハーツホン父娘の再来日 110
 - V ヘンリー・ハーツホンの死と新渡戸稲造の静養 111
 - VI 『武士道』の執筆前後 112
 - VII 津田塾大学への船出 115
 - 六 女子英学塾（現津田塾大学）での講演 115

稲造精神とララ物資

- 一 東日本大震災 119
 - 二 キリスト友会日本年会の発足日 120
 - I 大正六年五月一二日午後 121
 - II 「親睦会」での談話 122
 - III 「知らぬ恵」 124
 - IV 「友会の使命」 125
 - 三 敗戦・太平洋戦争の終結 130
 - 四 象徴天皇制と二人のクエーカー 132
 - I 天皇制の護持 132
 - II ヒュー・ボートン 135
 - III ボナー・フェラーズ 137
 - 五 ララの創成 140
 - I 日系人強制収容所に対する支援活動 140
 - II 戦後の米国在留邦人の動き 142
 - 六 ララの構成 143
 - 七 ララ物資 145

八	「ララ」の三代表	147
	I ジョージ・アーネスト・バット	147
	II ヘンリー・ジョセフ・フェルセツカー	148
	III エスター・B・ローズ	150
九	救済活動	152
	I 活動の準備	152
	II 救済活動の実施	154
	III ワークキャンプ	157
	IV 「山羊のおじさん」	160
	V 「CAC」	163
十	とづくにの あつき心	163
随想		
	一 見えないものに目を注ぐ	166
	二 光は闇より	168
	I 闇に輝く日	169
	II 岩橋武夫	173

	III ヘレン・ケラー	177
三	その時私は：二〇一二年三月二日	181
四	神からのオポチュニティ	184
	I ペンドルヒル	184
	II ファーバンク・フェル	186
	III 感話	187
	IV コルトハウス	188
	V ブレスウエイトの祖先	189
	VI スワスマア・ホルルの由来	191
	VII ジョーダン	193
	VIII ジョージ・フォックスの墓	194
	IX ウッドブルック・クエーカー研修センター	195
――二〇〇六年普連士学園『研究紀要』第13号からの抜粋――		
新渡戸稲造の宗教講演		
	I 一人日本人の見たるクエーカー主義	201
	II 新渡戸稲造のクリスマス講演	203
		227

(一) 降誕節	229
(二) クリスマスについて	230
「クリスマスに就いて」	232
《キリストは歴史的人物》	232
《キリストの生まれしユダヤの国》	233
《キリストはいづ生まれか》	235
《心のクリスマス》	236
《クリスマスをする理由》	238
《クリスマス起源》	240
《サンタクロースは善い爺さん》	241
《フレンドのクリスマス》	242
《心の中のキリストの種》	243
(三) 馬小屋のイエス	245
馬小屋のイエス	246

あとがき

はしがき

二〇一二年のこの日午後、関東地方は未曾有の大竜巻に襲われ、栃木や茨城県では甚大な被害もたらされた。関東のみならず日本本土一円、一天にわかにかき曇り、雷雨と雹やあられに襲われたのである。その晚いただいた電話は、予想にもし得なかつた吉報で、まさに「青天の霹靂」であった。時をおかず、翌日、普連土学園の監査があつた。そこでは、監事から学園財政と併せ、クエーカーの学校として、やがて来る少子化時代に向け、どう建学の精神を維持し伝えていくべきか、重い課題が指摘され、*シグ*こそ、再スタートの時機であることも問われた。

普連土学園は、新渡戸稲造と内村鑑三の建言によつて創立された日本では唯一のキリスト教フレンド派の中学・高等学校である。創立以来流れている精神はクエーカーの大切にす **SPICES** だ。すなわち、**S** (Simplicity 質素・簡素)、**P** (Peace 平和)、**I** (Integrity 誠実)、**C** (Community 共同体)、**E** (equality 平等)、**S** (Service 奉仕)、または **Sewardship** (環境管理) である。奉仕と環境管理は時に応じてこもこも為されてきたが、昨今とりわけ大震災以後ボランティア活動と共に、原発事故に伴う環境問題がクローズアップされている。普連土学園としてもこの最後の「**S**」は喫緊の課題であり、氷山の一角にも満たない知識しか持ちえないが、温故知新、新渡戸稲造の精神をこれまでに発表した原稿により紹介するのも、筆者に与えられた役目ではないか、という思いに至つた。それが、本書の編集と出版の動機であり目的である。

大津光男